

ミステリ読書案内

2021. 2. 21 発行元

第206号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

パトリシア・モイーズの代表作

海外作家の中でまだ『ベスト表』などの形で取り上げていなかったのは…と考えた時にパトリシア・モイーズの名前が思い浮かんだ。私が大学生だった頃、イギリス女流作家の中心的な存在だった人物である。

イギリス伝統の本格もの

パトリシア・モイーズは1923年生まれ。イギリスの代表的な本格ものミステリの作家である。1年1作のペースを守り続けたので、ティベットのものの作品は19作止まりである。私はそのうちの10作を読んでいる。

代表作を考えた時、『死人はスキーをしない』はすんなり決まる。後の2つは悩む。それほど作品の出来に差がないから、『殺人ファンタスティック』も考えたけれども、結局

『沈んだ船員』と『死の贈物』に決定した。無難な選択だと思うが、どうだろうか…。

当時は「クリスティの後継者」と目されたが、それから50年経ってみると、世の中の見方はだいぶ変わったのではなからうか。今、モイーズの名前はずいぶん薄くなってしまった気がする。作品のインパクトがどうしても弱い印象なのかもしれない。登場人物にしてもトリックにしても。1960年代～70年代は、本格もの作家は活躍しにくい時代だったのかもしれない。

No. 3 「死の贈物」

ハヤカワ・ポケット・ミステリの1165番。長編9作めに当たる。アメリカ探偵作家クラブ賞の長編賞の候補に挙げられた傑作。

ティベットの警視はクリスタル未亡人の誕生日パーティに招かれる。実は被害妄想と思われる未亡人から警護の依頼があったからだ。未亡人の3人の娘夫妻が集まり、ティベットの安全対策を取ったにも関わらず、未亡人は毒殺されてしまった。面目を失ったティベットの、ヨーロッパ中を駆け巡るようして必死の捜査を展開するというストーリー。

この時期になると、非常に安定した作品作りとなり、全体の構成がしっかりと整えられている。安心して読める一冊。

No. 1 「死人はスキーをしない」 モイーズの最初の長編。私が持っている本は1973年の早川書房の『世界ミステリ全集』第14巻。クリスタナ・ブランドとジョイス・ポーターとの合わさった一冊になっている。厚くて重い本。その後、ハヤカワ・ミステリ文庫にも収録されている。

モイーズ作品の名探偵ヘンリ・ティベットの警部夫妻は休暇を取ってイタリア・アルプスのサンタ・キアラのスキー場にやってきた。そこでリフトに乗った観光客が射殺される事件が起きる。内密にスコットランド・ヤードから現地の麻薬密輸に関する調査の任務も与えられていた警部は事件の中に巻き込まれて行ってしまう。警部は地道な努力型の探偵であり、ここでもこつこつと捜査を積み上げ、ひとつずつ論理を前進させていく。謎を解き明かす独特の勘の持ち主で、イギリス伝統の本格ものミステリの王道に沿った展開。ただ、後半に入ってから追跡シーンは映像的にも見どころが広がるだろうという描き方になっている。モイーズは作家になる前に映画に関わる仕事についており、そこで培った「絵になる」場面作りに優れている。そういう意味では、より現代的な要素も兼ね備えた作風とも言えるだろう。

この作品は1959年に発表されるとたちまちに話題となり、「クリスティの後継者」などとの評価がついた。モイーズの代表作として挙げるとするならば、どうしてもこの作品がNo. 1になる。

No. 2 「沈んだ船員」 モイーズの長編第二作になる。私が読んだのはハヤカワ・ミステリ文庫。ティベットの警部夫妻、今回はイギリス東海岸のベリイブリッジを訪問することに。二人が休暇を取って遊びに行くと、そこに事件が待っているというパターン。刑事だからといって、警察小説的な捜査の様子はまったくくない。地元警察の応援はもらっているけれども。

ヨットに乗って舟遊びを始めるティベットのだが、2年前に事故死したらしいヨットマンの話を聞く。素人でもしないような失敗で命を失ったという顛末にティベットの不自然な感覚を抱く。あちこちに話を聞いていく中で、その地区の選挙に巻き込まれたりする。その地区の中での人間関係が少しずつ浮き彫りになり、会話や行動の端々に零れ落ちてくる手掛かりで犯人を推理していく。最後に達した結論に従って、ティベットの船上で犯人と対決するという流れ。イギリスの小さな町での出来事が丁寧に描かれ、そこに暮らす人々の実情がしっかり書き込まれている作品と言えるだろう。そこがイギリス・ミステリで、アメリカのような息をつがせぬ素早いテンポはなく、明るくゆったりとしたBGMが流れている雰囲気である。